

明治時代における日本人が編纂した中国語辞典の研究

王 雪¹

1、はじめに

辞典は時代の文化をよく表し、各分野での研究に有用であり、特に 100 年余前の辞典は貴重な歴史、文化と言語価値を持っていると共に、教育史上の不可欠の一環となされている。近代日本における中国語辞典の編纂は 20 世紀初頭まで遡り、最初の日中辞典は西島良爾・牧相愛共編の『四声標註支那官話字典』(1902)であり²、最初の中日辞典は石山福治編の『支那語彙』(1904)である。1902 年から 1945 まで四十三年間に出た字典ないし辞典は四、五十点がある。そのうち、明治時代に既に 10 余りの中国語辞典が出版された。しかし、近代日本の中国語辞典を取り扱った先行研究の中で、発足期の辞典を形式から内容まで取り上げた考察は見当たらない³。本論はこれらの辞典を判型、体裁、版面など書誌学の考察をはじめ、語彙の収録など特徴を一つ一つ考察してから、全体像をつかんでその時代の共通点を明らかにする。

¹ 山口大学・東アジア研究科・博士後期課程

² 陳明娥は『日漢辞彙』(1905)が日本で最初の日中辞典であると主張しているが、筆者はこれは誤りではないかと思う。『日本明治時期北京官話課本詞彙研究』廈門：廈門大学出版社、2014 年、177 頁。

³ 先行研究では、著書として六角恒広による『中国語関係書目(増補版)』(2001)がある。明治以後の近代日本において、中国語教育に使用された教科書を主として、辞典、商業会話・軍用会話・旅行会話などの類をも収録する。1867 年から 1945 年を第 1 部とし、以後 2000 年までを第 2 部として増補。発行年月日の順に配列している。全部の辞典は収録されないが大事な参考となる。その後、六角恒広はこれらの辞典の散逸を防ぐために、明治から昭和 20 年(1945)までの間で中国語学習に使用された辞典をおさめて全 16 巻の『中国語辞典集成』を作って、2003、2004 年に刊行した。多数の辞典は本集成に収録される。1912 年前の辞典は『支那語辞彙』(1904)、『日漢辞彙』(1905)、『北京正音 支那新字典』(1905)、『日華語学辞林』(1906)、『同文新字典』(1909)がある。その他、波多野太郎編『中国語学資料叢刊：白話研究篇』(1984)第 2 巻に『四声標註支那官話字典』(1902)を収録する。波多野太郎編『中国語文資料叢刊』第 4 篇第 3 巻(1994)に『日清会話辞典』(1903)を収録する。また、国立国会図書館のデジタルコレクションでも多くの辞典が公開される。たとえば、以上の著書に収録されない『日華会話辞典』(1906)はデジタル化されている。論文は陳娟『清末における日本語の辞書—中国人学習者を対象として』³があるが、すべての日本人が編纂した中国語辞典を取り上げなかった。

2、明治時代における日本人が編纂した中国語辞典

明治時代 300 点以上の中国語の教科書に対して、1902 から 1912 年まで出版された日本人による中国語辞典は以下の 14 点のみがある。

| | 書名 | 編著者 | 出版年(西暦) | 出版社 |
|----|------------|--------------|---------------|----------|
| 1 | 四声標註支那官話字典 | 西島良爾・牧相愛 編 | 1902. 7 | 青山嵩山堂 |
| 2 | 日清会話辞典 | 池田常太郎 | 1903. 9. 19 | 丸善株式会社 |
| 3 | 日台新辞典 | 杉房之助 | 1904. 11 | 日本物産(台北) |
| 4 | 支那語辞彙 | 石山福治 | 1904. 12 | 文求堂書店 |
| 5 | 日華字典 | 善隣書院 | 1905. 3. 15 | 文求堂 |
| 6 | 日漢辞彙 | 石山福治 | 1905 | 南江堂・文求堂 |
| 7 | 北京正音 支那新字典 | 岩村成允 | 1905. 8. 8 | 博文館 |
| 8 | 日華語學辞林 | 井上翠 | 1906. 10 | 東亜公司 |
| 9 | 日華時文辞林 | 中島錦一郎・杉房之助 編 | 1906・6 | 東亜公司 |
| 10 | 日華会話辞典 | 鈴木暢幸 | 1906 . 10. 27 | 富山房 |
| 11 | 日台大辞典 | 台湾総督府民政局 学務課 | 1907. 3. 30 | 編者(台北) |
| 12 | 日華新辞典 | 松平康国・牧野謙次郎 | 1907 | 東亜公司 |
| 13 | 日台小辞典 | 台湾総督府 | 1908. 3. 24 | 大日本図書 KK |
| 14 | 同文新字典 | 伊沢修二 | 1909. 1. 15 | 大日本図書 KK |

(本リストは六角恒広『中国語関係書書目(増補版)』(2001)、陳娟『清末における日本語の辞書—中国人学習者を対象として』(2014)を参考した)

本論は「中国語辞典」を考察したいが、実際には近代における中国語で主流である北京語の辞典のみを考察対象とする。当時台湾に行われる言語は漳州語、泉州語、客人語(又は廣東語)及び蕃語の四種類である、前の三種は中国語に属し、蕃語は南洋語、即ちマレー・ポリネシア語族に属する⁴。上掲の『日台新辞典』『日台大辞典』『日台新辞書』は省略させていただき、以外の 11 点の辞典を解題し、内容の特徴を簡単に紹介する。

(1) 『四声標註支那官話字典』

西島良爾・牧相愛共編、1902 年に発行され、タテ 19cm の一冊である。一種の日中辞典である。

⁴ 『日台大辞典』緒言、台湾総督府民政部、1907 年。

巻頭には近衛篤磨の題字「千里咫尺」と1904年の際の中国の領事蔡熏により書かれている序がある。凡例でみると、本書は編者が各其公餘の暇を以て従事せる講席に於ける教案中より其日常最も普通で使用せるもの蒐集して成る。語彙の出典が書いていない。本文は縦書き、一ページを上下に二段組で配列する。日本語の単語や語句をいろは順に排列し、その下に中国語を記し、カタカナで発音を示している。

辞典部分と補遺と二部分から構成し、総4454語を収録する。辞典部分には約3289語があり、親字には会話文も入り、見出し項目のカナ数の最小が2、最多が27である。補遺が1165語で、全部は単語、字数は5字が最多である。北京語土語とはやる俗語の多く収録するのは本辞典の明瞭な特色と言える。例えば「じぶんのことをしてひとをかまうな 你管你的罷不用管人家的事(各掃自己門前雪休管他人瓦上霜)」は、中国語の白話小説、明『金瓶梅词話』第三十三回：“那老者见不是话，低着头，一声儿没言语走了。正是各人自扫檐前雪，莫管他家屋上霜。”と、明『警世通言』：“三官正厌王定多管……王定拜别三官而去。正是各人自扫门前雪，莫管他家瓦上霜。”にもある。⁵

訳文について、「かぶる(ムジツヲ)受」「はじめる 動手」「かんゆう(奸雄) 嫉賢妒能誤國害民」のように、意味を狭くし、拡大し、あるいは名詞を動詞にことが多い。これは本来のまとまった文章から一句を抜き出し、前後の文脈に配慮せずそのまま使用しているように思われる。

(2) 『日清会話辞典』

池田常太郎編、1903年に発行され、1904年8月30日再発行された。日本語を中国語で訳する辞典である。冒頭の表題紙でタイトルと作者以外に、中国人の北京語教員、翻訳者に校正、補充されたことを記載する。⁶これによって、当時の中国語の辞書を編纂したときに中国人も参与したことがわかる。本辞典の中国語の発音と訳文の正確度が高いと推測できる。表題紙の後は題字で、続いて緒言である。本辞典の編纂経緯が緒言に見られる。池田常太郎が北京在留の時に清国教師と共に日本辞書、和英辞書、英清辞書等の各書を参照し、専ら日用適切な北京語のみを編纂した。完結まで四年間を費やした。緒言にも四声略説と発音法の説明も記載する。それからは目次である。次に176頁の本文に入る。

内容は横書き、日本語発音のアルファベット、日本語の見出し、品詞類、中国語の訳、中国語発音のウェード式⁷の表記の順である。そのうち品詞類は()で表示し、中国語の発音を仮名

⁵ 『中華俗語源流大辞典』(李泳炎、李亚虹編著中国工人出版社、1991年)による。

⁶ 清國前日本及奥地利公使館員北京語教師欽天監博士 榮善先生發音校正 同奥地利公使館員北京語教師舉人 岳博先生補助編纂 同外務部頭等參贊管東文繙譯官候補道臺 陶大均先生補 同外務部東文繙譯官候補知縣 李鳳年先生補。

⁷ ウェード式は、中国語をローマ字によって表記する方法の一つ。19世紀後半にイギリスの中国駐在

で上に、四声を○で四隅に注する。日本語は発音のアルフェベットの順番で配列する。本書は発音を重視するのが特徴と言える。中国語の訳は簡潔で、例がない。解釈が完全ではないまたは違う問題がある。たとえば、

Abekobe^{アベコベ}反対 (副) 対面兒^{トイミアル}Toi mi alu

古代から現代に至る日本語の総体を凝縮した日本で最大規模の国語辞典でありである『日本国語大辞典』第二版 11 巻で「反対」は物事の様子・位置・順序・考え方などが他のものと逆の関係にあること、とある意見などに対して逆らい、否定する意味と二つの意味を記す。これによって本辞典では意味を間違ったのが分る。

正文の後で、付録各表を付いている。数字、月名、日数、一周日、時、四季、方角、貨幣、度制、斗量、衡制、官名、地名、締盟各國などを含む。最後の 19-30 頁の附録は日用會話であり、會話文典摘要、命令詞、疑問詞、會話の四種類の内容に分けられている。

(3) 『支那語辞彙』

石山福治編、1904 年 12 月に初版、1921、1925 年に再発行された中日辞典である。本辞典は筆者が管見した最初の中日辞典である。本論で参考したのは 1921 年の増訂改版の 18cm の一冊である。序言がなく、例言、片仮名発音順検索、辞彙字画索引を出す。例言では、初版してから版を重ねるごとに少しの訂正を加え、時世の急なる変遷に従い言語を訂正した新版であり、使用されるのは北京官話を主とし、若干の余は著者が加えると書いている。

本文は 595 頁にわたる。内容は縦書き、見出しの語彙は全部一字であり、五十音図順に配列し、発音を片仮名で傍に標注し、四声を○で四隅に表し、品詞類がなく、幾つかの例を後に付け、見出しの字は縦線に換える。発音の表記は仮名以外に、符号（ がエ、オ、チ、シの後に付かれる場合が見える。例言で「エの後の（はエを出すよりもいささか口に丸みを加えると意味し、オの場合は少しく口に平みを加え、チおよびシの場合は舌先を歯の根に接近させる）などのように説明する。最後は十頁のウェード式の発音の索引である。

(4) 『日華字典』

善隣書院編、1905 年 8 月に出版されたタテ 15cm×ヨコ 10cm の小型で革装丁の一冊である。1910 年に再版。中国語の字を日本語で解釈する一種の中日辞典である。序言や凡例などは無い。辞書部分は 320 頁、索引は 54 頁、合計 374 頁である。内容は横書き、一頁を左右に二分し、親字が全部一字で、9246 文字を収録し⁸、ウェード式ローマ字綴りのアルファベット順に配列する。親字を左側に置かれ、右側に小さな 1・2・3・4 の数字で親字の音調を表し、多音の場合は音調

公使を経てケンブリッジ大学教授となったトーマス・ウェードが使ったローマ字表記法で、その著書『語言自邇集』といった中国語教科書で用いられた。

⁸ 字数は陳娟『清末における日本語の辞書—中国人学習者を対象として』(2014) を参考した。

の数字を並べる。次は日本語の漢字と片仮名で意味を簡単に説明し、不完全な場合が多い。以下の例を出してみよう。

回 2 振回ル、(一回) 一度

會 3.4 (一-兒) 暫時

會 4 集一、黨派、教派、修得シタル能力、才智

「回」では、「帰る」という意味が記されていない。「會」では、助動詞としての意味が書かれていない。

例語を加える場合もあり、「|」で親字に換える。その後ろ、他の読音を挙げる。例えば回は AO WA YAO 三カ所で別々出現するが、それぞれの後に他の二つの発音を標注する。

陳娟(2014)は、本辞典は意味の解説を中心とし、声調とウェード式で引くことから、日本人の中国語学習者向きの実用的な字典と判断する。一方、六角は家蔵本に「呉子琴 WU TSZ CHIN」というスタンプ様のものがある理由で、この時期は中国からの留学生最盛期で、『日華辞典』も中国人留学生にも大いに使用されるのかと異論を持っている⁹。

(5) 『日漢辞彙』

石山福治編、1905年6月8日に刊行されたタテ15cm×ヨコ10cmの一冊の特製本である。合計346頁、序言がなく、例言から始まる。例言で使用される符号や表音式などの体例、及び「兒」「子」「了」について説明する。即ち「^{ブルツウ}兒子」での「兒」と「子」が主字であるに対して、「^ル狗洞兒(いぬくぐり)」、「^ル肉瘤(瘤)子(瘤)のような名詞に付く「兒(r)」と「^{ツウ}子(tsu)」、及び一句の終わりに付き過去の働きを示す「^ラ了(1a)」は接辞であり、中国語で常用されるので本辞典も多く採用する。石山福治がこの北京語の特徴に注目していることがわかる。内容は縦書き、一頁を上中下に三分して利用する。上は親字、平仮名で書かれ、「|」で漢字、()で品詞類を出す。親字は全部単語で、文がない。下は中国語の訳文であり、違う意味を○⊖で明瞭に類する。中国語の右側に仮名で発音を表記し、四声を○で四隅に表す。ところが、品詞類に「活名」と「形動」があるが、凡例では品詞に関する説明がなく、前者は動詞語尾変化による名詞化するものであり、後者は形容詞のことを指すと見える。たとえば、あめふり「雨降」(活名) 下雨、あやふし「危」(形動) 危険である。

本文の後に5頁のウェード式と片仮表記との対照表があるので併せ参考できる。なお付録の形で、地域・国名・中国の主要地名や人物・河川などをあげてその発音を注してある。度量衡の日中対照表も出ている。

編者はその後教科書を出したこともあるが、1945年6月に大部の『支那語大辞典』を出した。

(6) 『北京正音支那新字典』

⁹ 六角恒廣『中国語書誌』不二出版社、1994年、105頁。

岩村成允編、1905年8月8日に発行された18cmの一冊である。巻頭には1903年10月から四年間駐日公使をつとめた楊樞の題辞があり、次に編者の自序と緒言がある。緒言により、岩村は北京留学中に辞典の必要性を意識してから本辞典を編纂した。発音の表記法はアルファベットのウェード式と仮名を併記するのを採用し、両方を対照し不足を補うためであると記すが、実際に内容には仮名表音法が出てない。次は凡例であり、四声を含む発音、索引法、配列順序、同音異声音などを説明する。後は目次と付録である。

内容は横書き、親字は一字の音節で、1・2・3・4の数字で四声を表し、熟語と俗語、文語を例とし後に出す。正文は230頁にわたり、英字発音表によりabcd順、また同音の項目ごとに声調順に排列してある。同意味の字を{ の符号で表示している。例えば

{ 咎 2 多咎・咎姓・tsn²
 倨 2 (同上) 倨們
 咱 2 (同上)
 嗜 2 (同上)

その後の231-368頁は書引部首目録、索引表、同字異音表、陪伴字表である。陪伴字の意味は量詞である。最後は1-40頁の数字、度量衡貨幣解説并比較表、清國管制大要、清國陸軍大要、清國官書官名異稱及英譯、皇族封爵表、地名発音略表、各省及省城、海陸通商地、在清國日本領事館所在地及管轄區域である。

しかし、本辞典は「北京正音支那新字典」と名付けるが、漢字の意義の説明はなされていなく、発音表であろうと言える。このため、中国語の発音を知りたい学習者、特に日本人に対して利用価値が高い。

(7) 『日華語学辞林』

井上翠編、1906年10月に発行された菊判の一冊である。例言と索引は40頁、本文は616頁である。巻頭に当時に駐日中国欽差大臣兼遊學生総監督楊樞が「言文行遠」と題し書いている。例言で日本人が中国語を研究しかつ中国人が日本語を学習するために、本来自身の生活の一助と思って収集したものを整理し世に出したと書いている。例言二篇、それぞれ日本語・中国語で書いている。日本語篇は編纂体例および中国語の発音を簡単に説明し、中国語篇は索引の利用方法と清・濁・鼻・拗音の仮名とウェード式の発音の対照表を出す。これを見ると、井上翠は本辞典を両国人にも役立つように工夫した。

辞典の語彙は岡本正文の『支那声音字彙』(1902)により発音および四声の順に配列し、¹⁰例言の後には発音の索引と畫索引である。版面は縦書き、一頁を上下二部分に分けて組んでいる。まず中国語の見出しをあげ、一字と同字の詞・句を配列する順である。中国語に仮名で発音を

¹⁰ 『日華語学辞林』の例言に「本書語詞排列ノ順序ハ岡本正文氏編支那聲音字彙ニ據リ發音及ビ四聲ノ順序ニ排列セルモノナリ。」とある。

示し○で四声を記す。下にそれぞれの日本語を字と片仮名で訳を付している。会話性質の短句も収録するので、扱われる当時の北京語の特徴がよく見える。たとえば、

○摘不^{チヤイブ}●開^{カイ}身子^{シエヌツ}○ 身ヲ引カレナイ (忙シクテ)。

『北京方言词典』¹¹で、「摘」はこの意味がなく、同音節で二声の「择」は同じ意味がある。発音が近いので書き間違ったか、漢字が混用されたかまだ論証できない。

それから「挨着大樹有柴燒 (大火ノ傍二居レバ、薪ニハ不自由セヌ)」「长八燈臺照遠不照近 (一丈八尺ノ高イ燈臺ハ遠クヲ照スガ近クハ照サナイ (燈臺下暗シ。))」のような俗語も多くある。

巻尾の奥付に、出版年を明治卅九年、光緒卅二年と両国の年号で表記するのはほかの辞典には見られない。本辞典の出版意図を表す。

(8) 『日華時文辞林』

中島錦一郎と杉房之助共編。1906年6月に発兌される。本辞典は普通の辞典ではなく、当時中国清朝の時文の専門辞典である。

辞典はまず凡例、発音例、五十音目次、付録目次(筆画による漢字索引目次)を出す。凡例により、時文において最も広く用いられた熟語を収録される。本文は137頁にわたり、2682語彙を収録し、日本語の五十音の行列に配する。このような配列順はこれ辞典しか見られない。一頁を上下二わけ、縦書き、時文用語を出し、仮名で発音を表示し、下に日本語訳を付けている。付録は74頁にわたり、信頭信尾用語、信札文例、廣告文例、證書文例を含む。

付録の後に、本書は特に漢字索引欄を設け、漢語によって訳語を探るに便利である。奥付けに「明治39年6月日本で発行、光緒32年閏四月二十三日中国で発行」があるから、1906年に中両国共に発行されたのが分かる。

(9) 『日華会話辞典』

鈴木暢幸編、1906年に出版された19cmの一冊である。序言がない。巻頭は凡例である。本書は二編から構成し、凡例でその編述の方針や使用法などを箇条書きに述べる。第一編は『康熙字典』の内容から引き出し、中国語を見出しとし日本語で訳する形式である。漢字の日本語発音を仮名で傍に注し、日本語は全部平仮名で記す。日本語の品詞は「」で表示し、「名」は名詞、「代」は代名詞、「動」は動詞、「形」は形容詞、「副」は副詞、「接」は接続詞を表す。第二編は日本語から中国語に訳する形式である。日本語に相応する中国語の意味を知りたい人に便利のように本編の目的を説明する。日本語五十音図の順で配列する。凡例の後に発音、文字、名詞、動詞、形容詞、副詞をそれぞれ説明する。次に目次である。全書は縦書きである。

第一編は275頁にわたる。中国語の配列順は部首の画数であり、同部首の項目で部首以外の画数を順とする。詳細な索引がなく、ただ目次で一畫から十五畫まで部首の頁を出す。字のペ

¹¹ 陈刚、商务印书馆、1985年、322頁。

一ジ範囲が検索できる。始めは個数目、順数目、量数目、月份、日期、時辰の六つの種類の語彙を出し、それから辞書の正文に入り、頁も 1 から更新させる。語彙の分野は広く、生活と緊密に関わる語彙、句を含む会話用語が多い。連語や成語、俗語を収録していない。発音を表記しない。日本語で訳し、傍に平仮名で発音を注し、品詞類を下に表記し、ある語彙も用例を挙げる。たとえば、

洗澡

ふろ
風呂 (名)

澡堂的水熱了沒有 風呂わ沸いて居ますか

である。

一語が複数の品詞を持つ場合ではそれぞれ日本語の活用形によって説明する。たとえば、

傷心

かなしい (形) かなしみ (名)

かなし一む. マ. ミ. メ (他動)

のようである。ところが、品詞類が全面でない現象が多い。見出しを含んだ例ではなく、意味を説明するための例もよく見える。一例をあげてみる。

雷

かみなり
雷 (名)

很利害的 ひどく鳴りますね

呀呵、好似落下那個地方去 おや どっかへ落ちたようです

第二編は 175 頁にわたる。約 3500 語の日本語の語彙が登録される。語彙は平仮名を使い、() で漢字と品詞類を別々に出し、中国語の訳は簡潔である。意味が複数の場合で、

からい (辛) (形)

辣

難受、辛苦

のように表示する。

(10) 『日華新辞典』

松平康国と牧野謙次郎共編、1906 年発行された 13cm の一冊である。本辞典は序言、凡例や例言なし、日本彩色略図と日本屋内面略図及びその説明 6 頁を含め、合計 2061 頁である。1969 頁は「日華新辞典」の部分で、86 頁は「日本語法要略」である。

辞典部分は縦書き、五十音図順で並び、平仮名で日本語語彙や外来語を示し、下に品詞類、漢字と中国語訳で配列された。中国語訳の変わりに、あるいはその前に、日本語を挟んで訳すものもある。例えば「開口」の条で「口を開く之意」と示す。後で活用形を出し、品詞類も付く。その以上、出典を示し、或いは挿絵を添える場合もある。これは着目した辞典の初めてである。中国語訳で「謂…也」の句型が使用され、「謂」を省略し「…也」が一番多い。「あかし」の三語の例を挙げる。

あかし「活名」(燈)ともしび。あかり。燈火也。

あかし「活名」謂證據。

あかし「形動」(赤) ⊖色赤也。又紅也。⊖光明無一點陰翳也。⊖心無欲也。不疚也。(丹)

例に出る「活名」「形動」の品詞類は本辞典の特別な名称であり、ほかに「形名」もある。関わる説明もなが、語彙から見ると、「活名」と「形名」は動詞と形容動詞の語尾活用による名詞化のこと、「形動」は形容詞のことを推測する。

本文の後、中国語の「日本語法要略」を付けている。日本語の品詞分類、自動他動詞、動詞活用、変格など日本語文法を詳細に紹介する。これは中国人が日本語を学習するために役に立つ。

以上のように、本辞典は形式から内容まで同時期において他の辞典より充実と言える。以後の辞典の参考となるかを考察したい。ところが、中国語の発音を付けないのは残念と思う。本辞典は中国人の日本語学習書を主な対象とすると推論する。

(11) 『同文新字典』

伊沢修二著、1909年一月、大日本図書株式会社発行。菊判、序文・凡例40頁、本文302頁、索引102頁、巻頭に伊藤博文の題字「書同文」がある。

凡例によると、この本は漢字統一会の主義に基づき中日韓三国の音と意味を注したものである。日本の漢字音は、平仮名で漢音と呉音を示し、中国音と声調は伊沢式記号、韓国音はハンゲルで表している。

3、明治時代の日本人が編纂した中国語の辞典の特徴

周知のとおり、辞典が成立するまでに材料の収集、整理・加筆、修正など複雑な過程を必要し、編者に対して知識、時間と情熱が非常に必要であるために、それらの辞典は現代の巨大な辞典と雲泥の差が、当時の両国語の学習者に対して大きな役に立った。さて、明治期の中国語辞典はその前の時代の中国語の辞典と比べて大革新も見える。明治時代の日本人による中国語の辞典の特徴をまとめると以下のようなになる。

3.1 辞典の種類

計11点の辞典で、中日辞典は5点(中日韓の1点を含む)、日中辞典は4点、両方を均等に

占めるのは1点、中中辞典は1点である。中日、日中の両方から構成する1点の辞典は、異なる読者の需要を満足するためである。そのなかに、会話辞典は2点、時文辞典は1点、中日韓辞典は1点。中日辞典は一番多いが、「中」または「華」から命名されない。『四声標註支那官話字典』『支那語辞彙』のようなまだ連想出来るが、『日華字典』『日華語學辞林』の名からみると、内容を勘違いやすいと思う。近代における中日両国語の対訳辞典の命名について、『東中大辞典』（中国 作新社・1908）の緒言で言及する。母語と関わらず、辞典の目的に合わせ親字の言語を名称で前に置くのは国際的な基準とすべきであるが、中国人はこれに従わないことが多い、と述べる¹²。本辞典はこれを法るが、他の中国人が編纂した類似辞典は見られない¹³。同様に、明治期の日本人による中日辞典も「中」または「華」から命名するのは見られない。明治以後に、「漢和発音字典」¹⁴（1914）が見られる。

1902年から出現して年ごと2点ぐらい世に出るが、明治期後期の1910、11、12年三年間は空白である。これは全体的な中国語教科書の連動姿と合致している¹⁵。

八年間において11点の辞典が世に出、当時に辞典に対して需要が多いと考えられる。明治時代において日本人は中国語に関心が高まり学習者が増加していたとともに、1906年前後に日本の中国人留学生もブームとなった。それで、中日両語の辞典に対する需要が増大した。大部分の辞典には編纂対象を明白に書いていないが、『日漢辞彙』は中国人学習者に対して難しく、『北京正音支那新字典』は中国人に対して利用価値が少ないように、その主な対象は編纂特色から推測できる。而して、両者にも活用される辞典は大部分を占める。

上述の字典は中国語学習者に対してどれほどの影響があったか推測できないが、11点の辞典の内容が重ならなく、同じ辞典は再版されたものもあるので、辞典に対して需要にあわせ利用価値を発揮したのと推論する。

3.2 辞典の形式

日本において中国語教育が、1876年から「唐話」から「北京官話」に転換してきた。¹⁶唐話に

¹² 『東中大辞典』緒言：中國向例。凡外國語字書。不問性質如何。其署名皆以本國名冠首。而置外國名於下。……凡外國語字典。（或辭典）可分為二種。一則以本國語注解外國語。此種字典。其目的在使讀外國書者。檢出不解之語。而查其適合本國何語。故必列外國語於前……一則……（上海：作新社、1908年）

¹³ 陳娟『清末における日本語の辞書—中国人学習者を対象として』（2014）を参考した。

¹⁴ 石山福治『漢和發音字典』、文求堂、1914年。

¹⁵ 1904、1905年ごろは高潮、1905年から急に下がって、1909年から1913年までその動きは穏やかである。

¹⁶ 1876年4月、旧東京外国語学校に新たに入学した20余名の生徒から北京語の教育をはじめた。これまで唐通事の伝統的な南京語で学習した生徒の大半も北京語に移った。生徒はもとより、教師もあらためて北京語の学習をよぎなくされた。1881年、南京語が廃止された。この切り替えは1871

関わる辞典と学習書は、『唐話辞書類集』¹⁷に20点録されている。めくってみて、テキストまたは辞書より単語帳みたいである。索引なし、唐話の部分のみを配列、発音や日本語訳は付されないことが普通である。発音発音と意味を記すものが少数であり、漢字の右にカタカナで唐音を表記し、漢字には返り点と送り仮名を付し、唐話に続いてカタカナ交じり文で日本語訳が示されている。ところが、親字は単語に拘らずに、一字から会話文まで配列されることが共通の特色と言える。

それを比較すると、上述の明治時代の辞典は変わらずに単語帳の形式が多い。それは、辞典に対して実用、効率への期待が変わらないからであろう。度量衡などの付録を付くのはまだテキストの形式みたい。しかし、形式上鮮明な変化がある。大部分の辞典は索引があり、音節ないし単語を親字とし、発音と解釈も付いている。一部分の辞典は語彙の品類、用例も加え、さらに挿絵も採用する。それは唐話時代を踏み出し形式上の大進歩と言え、基本的な規範を立てたと考えられる。

3.3 辞典の語彙と注音

中国語辞典に収録される語彙は会話語を重点に置く傾向が見える。その親字の配列順について、辞典は各自に特色を持ち、日本語の場合は日本語五十音順が主で「いろは順」が1点もあり、中国語の場合で発音のアルファベットの順が主であるが、漢字の部首または日本語訳の五十音語順に従うものもある。

それから、早速に大量な単語を覚えるように作成することが多いので、前述したように、親字の解釈が不完全であることが多い。その解釈の簡潔さが一つの特色となり、特に日中辞典がそうである。誤訳は目立たないが、筆写の失誤ないし前後の脈絡から独立させ機械的に使用する理由であろうと考えられる。

一方、全体から見ると、ほとんどの辞典における中国語に発音を表記する。その際、日本人にとって中国語の発音が一番難しく、そのなかで、四声を身につけておかなければならないことが教育界で共通認識になった。その使用される表音式は主に仮名とウェード式二種類がある。1958年に至り、「漢語拼音方案」が発表され、共通語の発音標記として用いられる。そして、中国語に表音する規範はなかった時代に、日本人が学習しやすいように、仮名で中国語を注音した。明治時代以後、中国語の注音に仮名を用いることについて、日本人学者は種類の検討を重ねていた。中国語学者倉石武四郎(1897-1975)は、仮名を利用しながら、注音符号だけの区別を一々表すとすれば、平仮名と片仮名とりまぜた上に、注音符号に直して考えないと発音できないような、うるさい記号上の約束がたくさんでき、学習者は結局仮名のとりこになって、

年に日中において署名された『日清修好条規』が発効し、唐通事から継承された南京語を首都の北京である北京語に転換させなければならなかったからであろう。

¹⁷ 古典研究会編輯、汲古書院、1969-1975年。

中国語にならなくなってしまうと¹⁸、批判したことがある。仮名式に合わせる四声の表し方は、左下から、左上、右上、右下の四隅に小圈を附するのが一般的である。

もう一種のウェード式は、19 世紀後半にイギリスの中国駐在公使を経てケンブリッジ大学教授となったトーマス・ウェードが『語言自邇集』で採用したローマ字による語音表記の方法である。四声をアラビア数字、つまり 1、2、3、4 で表記する。こうすると漢字の声調は一目瞭然となる。ウェード式は普遍に認められ、継承されている。

それから、以上の 11 点の辞典の表記法の状況を以下に示す。

| 表音式 | | 点数 |
|----------|----|---------------|
| 発音 | 音調 | |
| 仮名 | ○ | 4 (中日 2 日中 2) |
| ウェード式 | 数字 | 4 (中日 1 中中 1) |
| ウェード式・仮名 | ○ | 1 (日中) |
| 仮名 | 無し | 1 |
| 日韓中伊沢式記号 | | 1 |
| 無し | | 2 |

このように、「ウェード式ローマ字表記法」より「カタカナ式表記法」のほうが多く採用される。その理由は、『日清会話辞典』の序文から分かる。序文に既刊の中国語の学習書の中で発音の最も正しいのはウェードの『語言自邇集』であると明記しているが、同時の日本人にとってカナ式がより簡便であるためにカナ式を採用する。仮名表記法の不足をおぎなうように、『語言自邇集』におけるウェード式ローマ字により発音表を巻首に掲げる¹⁹。ほかの辞典も同じ理由であると判断できる。『日漢辞彙』にもウェード式と片仮表記との対照表を載せて併せ参考する。それで、『日漢辞彙』のように、四声の表記法を説明しておかずに使用し、その時代において通用するのですぐ分かるであろう。また、両方を同時に併用する辞典も一点があるのは、発音を重点に置き配慮したのは分かる。

4、おわりに

本論は明治期の日本人が編纂した中国語字典を書誌的に展示してから時代的な特徴をあきら

¹⁸ 倉石武四郎『支那語教育の理論と実際』昭和 16 年、東京：岩波書店、144 頁。

¹⁹ 岩邦成允編『北京正音 支那新字典』明治 38 年、東京：博文館。諸言に「支那語の發音はもつとも困難にして、本邦の假名にて到底之を書き現はすこと能はず。又英文綴は假名に比して、頗る正音に近しと雖も、亦十分ならざる所あり故に、本書は英文綴を主とし假名をも併記して、其不足を補はんとす両々対照して、之を習はゞ其正鵠を得るに庶幾からん乎。」とある。

かにした。明治期の8年間に11点の辞典が世に出、当時の日本人の中国語に関心の高まりが窺え、しかも、辞典の形式は、語彙の品類、用例、挿絵の採用することから、基本的な規範を立てた。時代需要に応じて早速覚えるために、それに日本人の利用上の便利を考えて、語彙の解釈が簡潔に付けられ、辞典の注音方法は「ウェード式ローマ字表記法」より「カタカナ式表記法」のほうが多く採用されているのが見られる。要するに、明治時代の中国語辞典は、形式を始め内容まで局限性があるが、唐話時代と比べると鮮明な進歩が見える。発音などに対する処理は時代の特色と言える。

さて、1902年から1945年までの間に、中国は清国から中華民国と変わり、従って中国の社会状態における幾多の著しい変化もあり、時代人の思想に伴い言語も変化してきた。中国語の辞典は時代に間に合わせ語彙を添削、修正するのは当たり前と思われる。それで、明治以後、字典を編纂することはさらに普通的になりつつあった。今後は大正昭和時代の辞典をまとめて論述し、時代特色を発見してから、明治時代と対比し、この二十年間で中国語の辞典の変遷を発見する。

近代東西言語文化接触研究会

本会は、16世紀以降の西洋文明の東漸とそれに伴う文化・言語の接触に関する研究を趣旨とし、具体的には次のような課題が含まれる。

- I. 西洋文明の伝来とそれに伴う言語接触の諸問題に関する研究
- II. 西洋の概念の東洋化と漢字文化圏における新語彙の交流と普及に関する研究
- III. 近代学術用語の成立・普及、およびその過程に関する研究
- IV. 欧米人の中国語学研究（語法、語彙、音韻、文体、官話、方言研究等々）に関する考察
- V. 宣教師による文化教育事業の諸問題（例えば教育事業、出版事業、医療事業など）に関する研究
- VI. 漢訳聖書等の翻訳に関する研究
- VII. その他の文化交流の諸問題（例えば、布教と近代文明の啓蒙、近代印刷術の導入とその影響など）に関する研究

本会は、当面以下のような活動を行う。

1. 年3回程度の研究会
2. 年2回の会誌『或問』の発行
3. 語彙索引や影印等の資料集（『或問叢書』）の発行
4. インターネットを通じての各種コーパス（資料庫）及び語彙検索サービスの提供
5. (4)のための各種資料のデータベースの制作
6. 内外研究者との積極的な学術交流

会員

本会の研究会に出席し、会誌『或問』を購読する人を会員と認める。

本会は、言語学、歴史学、科学史等諸分野の研究者の力を結集させ、学際的なアプローチを目指している。また研究会、会誌の発行によって若手の研究者に活躍の場を提供する。学問分野の垣根を越えての多くの参集を期待している。

本会は当面、事務局を下記に置き、諸事項に関する問い合わせも下記にて行う。

〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35 関西大学文学部中国語中国文学科
内田慶市研究室 (Tel.ダイヤルイン 06-6368-0431)

E-mail: u_keiichi@mac.com

URL: <http://keiuchid.sakura.ne.jp>

代表世話人：内田慶市